テレビの攻撃的モデルと幼児の攻撃行動

―モデルへの社会的強化の効果―

後浜恭子・兼弘敦子

Effect of Social reinforcement to the TV Violent Model on Aggressive Behavior in Young Children.

KYOKO ATOHAMA, ATSUKO KANEHIRO

問題・目的

近年，マスメディア，特にテレビの放映する攻撃行動描写の視聴者に及ぼす影響が，重大な社会問題のひとつとして多くの関心を集めてきている。

アメリカではテレビに攻撃番組があふれ，多発する少年非行への影響が大きな社会問題となっている(Stein, A. H. & Friedrich, L. K.)[1]。また，日本のテレビ番組は東南アジア方面にも続々と送られているのであるが，数年前，香港の九竜地区で日本の変身ものの番組のまねをしていた四歳の男児二人が，七階建てアパートの屋上から飛び降り，一人が即死，一人が重傷を負うできごとがあった。

視聴者は，たとえ成人でもその迫力や臨場感から，放映されるものを実像と知覚したり，現実感を著しく歪められたり麻痺させられたりすることがある。まして現実と非現実とがまだ混沌とした未熟な乳幼児の場合には，映像される人物の行動や態度に同一視する可能性はさらに強まり，機械人間や変身人間をまねて，高所から飛び降りたり，刃物で傷つけたりすることも起こり得るであろう。

攻撃の定義にはポジティブな面，ネガティブな面の二面が考えられる。例えば，攻撃性について，個人の積極性あるいは自主性を反映したものと解し，ケースワークに応用したaggressive case workという方法がとられる場合がある。これは，かなり積極的にケースワークを進めていくというもので，この場合には攻撃性のポジティブな面を重視しているといえよう。

一方，ネガティブな意味では，攻撃性とは一般的にどのような形であれ，危害を避けようとする他人に，危害を与えようとして行なわれる行動である，とされている。本研究では攻撃性をこのネガティブな意味からとらえ，以下検討していくこととする。

さて，攻撃行動が他人の行動を観察することによって学習されるということを実証したのはBandura, A.であった。彼は，自ら試行錯誤して行動を習得する直接学習に対して，示範者（モデル）の行動を通して，自ら直接経験することなく行動を習得する観察学習の有効性を示した。日常生活の中で自然と接する他者の行動が手本となって，我々はいろいろな社会的行動を身につけていく。これらは，環境との関わりの中で習得されるものという意味から，社会的学習ともよばれているが，攻撃行動もまた，社会的行動の一つとして，観察学習によって習得されるものと考えられている。

攻撃行動の生起については，他に本能説や動因説をみることができる。フロイトやローレンツの本能説は，持って生まれた本能や素質に原因をみる立場で，攻撃性は欠くことのできない人間性の一部としている。また，ダラードらの動因説は，攻撃は生得的な本能ではなく，特定の環境条件（欲求不満をひき起こす事件）に由来するとみる立場である。

攻撃行動が生得的なものか，あるいは後天的なものかを論じることは本稿の目的ではないが，必ずしもいずれか一方に規定される問題ではないと思われる。例えばHayes, S. C., Rincover, A. & Volosin, D.[2]の研究によれば，観察学習によって新奇な攻撃行動の習得が行なわれること，そして，それらの行動の維持には身体の感覚的フィードバック（感覚的強化）が必要となるといわれている。本研究では，これら攻撃行動生起の機序に関わる問題のうち，後天的学習として習得されるとするBandura, A.の理論に基づいて，攻撃行動を示すテレビ番組の子どもに及ぼす影響を実験的操作により検討したい。

Bandura, A.の初期の実験[3][4]は，攻撃的フィルムを用いて次のように行なわれた。3歳から5歳くらいの幼児を

対象として，ふくらましたBobo人形(大きなゴム風船人形）に攻撃を加えている映画（たとえば，鼻先を何度も殴る，人形の上にすわりこむ，"やっつけろ"と叫ぶなど）を見せる。その後で，映画の中の人形も含めたいろいろな玩具の用意している部屋で，一定時間自由に遊ばせる。この期間に子どもたちの行動を観察し，子どもの行動がモデルの行動にどの程度一致しているか，などを見るものであった。その結果，子どもはモデルの行動をそっくり模倣するということがわかった。さらに攻撃的モデルが非攻撃的モデルに比べて，多くの模倣的攻撃反応を生じさせること，男児の方が女児よりも攻撃行動を多く模倣すること，モデルの性別が重要な影響を及ぼすこと，モデルの現実性（実物か映画か漫画か）により，模倣の程度が影響されること，などが示された。このような実験結果から，Bandura, A.は他人の行動を観察することによって新しい攻撃を学習するということと，攻撃を実行することは別であるということを導いた。攻撃行動は欲求不満もなく，危害の意図もなく，無生物を相手に学習される，つまり，攻撃は他人に対して実際の危害を加えるのとは違った状況でも学習されうるとしたのである。

この実験にひき続いて，フィルムを用いた攻撃行動習得に関する実験が数多く行なわれてきた（Rosekrans & Hartup[5]；Collins[6]；高島[7]）。これらは，Bandura, A.同様，観察学習により攻撃行動が学習されることを実証している。

さて，このような攻撃行動の模倣生起の程度に影響を及ぼす要因の一つとして，モデルが受ける社会的強化（Social Reinforcement）があげられる。これは，フィルムの中で攻撃行動を示すモデルが，その行動によって報酬を受けるか（正強化），罰を受けるか（負強化）ということが，観察者の行動に影響をおよぼすということである。Rosekrans & Hartup[5]では，幼児を対象として，モデルの行なう攻撃行動に対して報酬が与えられる場合には，負の強化を与えたり，報酬や罰をランダムに与える場合に比べると，攻撃行動の模倣の多いことが示された。また，Puelo, J. S.[8]は，幼稚園児を対象に，モデルの受ける報酬量を変化させるという操作を行なったところ，モデルへの報酬が増すにつれて，子どもたちは攻撃的行動をより多く模倣するということを見出した。

一般に，攻撃行動は日常場面では制止されることが多く，モデルが罰を受けずにそのような行動を行なっていることは，脱制止の効果を持つことになると言われている。モデルが行なっても罰されないことから，観察者自身もその行動を実行しようとする傾向が強まるものと考えられている。

この脱制止効果に関連して，攻撃行動の模倣生起に影響するもう一つの要因がある。それは，子どもを被験者とした場合，実験室内に成人（実験者）が同室するか否かということ，そして，同室した場合に，示範される攻撃行動に対して，成人がどのような強化を与えるかということである。これまでの研究では，成人が実験室に同室した場合には，同室しない場合に比べて攻撃行動の模倣は少ないということが見出されている（根本[9]）。これは，賞罰の与え手である成人の存在によって，攻撃行動が制止されていると考えることができよう。それでは，この成人がモデルの示す攻撃行動に対して，正あるいは負の強化を与えたり，強化を与えない（無強化）でいたら，子どもたちの行動はどのように変化するであろうか。

Mandel, Robert, A.[10]は，子どもと一緒に番組をみる成人が行なうことばによる是認，あるいは非難を観察した後，子どもの攻撃的行動の生起について調べている。その結果，ことばで是認を受けた攻撃番組をみた子どもたちは，非難を受けた攻撃番組をみた子どもたちや，無強化で攻撃番組をみた子どもたちや，攻撃番組をみなかった統制群の子どもたちより，多くの攻撃行動を示すことが見出された。また，負強化群の子どもたちは無強化の子どもより，さらに攻撃的行動の少ないことが示された。

これらの問題は，日常生活の中で，おとなが子どもたちと一緒にテレビの攻撃行動をみる際，おとなの示す態度が子どもの行動にどのような影響をおよぼすか，ということに関わってくると思われる。

Bandura, A.の初期の実験以来，方法や解釈について幾つかの批判が出されてきた。例えば，実験者の製作するフィルムが標準的テレビ番組と違っていること，つまり，フィルムにはプロットがなく，テレビではあり得ない行動を示したりしていることである。また，フィルムの場面と実験室場面の設定を全く同じにしている研究が多く，実際にはテレビの視聴者がそのような機会を与えられることは現実にはあり得ないこと等である。さらに，従来の研究では被験者は一人で実験に参加しており，無生物であるBobo人形を相手に，攻撃行動を行なうということが多かった。これに対し，Drabman, R. S. & Thomas, M. H.[11]やO'Neal, E. C., McDonald, P. J., Cloninger, C. & Levine, D.[12]は，被験者が一人の場合と複数の場合とを設定して，仲間と一緒の場合の方が互いに影響し合って，攻撃行動の多く生起することを見出している。これらのことから，実際のテレビ番組に類似した材料を観察し，より日常場面に近い状況（見慣れた玩具や複数の友人がいること）の中で，子どもの行動変化をとらえる

ことが重要と考えられる。

本研究ではこれらの方法上の改善を行ない，実際のテレビ番組を材料として，同室する成人の与える強化が，子どもの攻撃行動学習にどのような影響をおよぼすかについて検討することを目的とした。従来の研究結果から，成人がモデルの行動に対して正の強化を与えれば，子どもの攻撃行動模倣の生起率は高くなり，逆に負の強化を与えれば，生起率は相対的に低くなると考えられる。そこで本研究では特に，成人が正・負いずれの強化も与えない場合に，子どもの観察学習にどのような影響をおよぼすのか，つまり，無強化が正・負強化の中間として位置するものか，あるいは正・負いずれかの意味を持つように機能するのかを検討していくこととする。

実　験　方　法

被験者にみせるテレビの内容は，ほんの一部ということではなく，ある程度の起承転結を含んだ物語を構成するよう抜粋すること，時間も可能な限り実際の番組の長さに近づけること，攻撃番組をみた後の観察のための自由遊び場面では，テレビ内容の状況との類似をなくし，自然な遊びの場面とすることを考慮した。

番組の選定（アンケート調査）

子どもとテレビとの関わりについてアンケートを作成し，実験に用いる攻撃・非攻撃番組の選択資料とした。この中で，子どもが実際にみている番組については，子ども向けで攻撃シーンの多いもの，そうでないもの，おとな向けで攻撃シーンの多いもの，そうでないもの（音楽，クイズ，スポーツ番組等を含む）の午後４時以降放映の番組を，各局とも満偏なく選択した。対象幼児が保育園児であるため，４時以降と限定した。計36番組につき，３段階評定（いつもみている，ときどきみている，みない）を被験者の親に依頼した。本実験の被験者48名（男子26名，女子22名）を対象にアンケートを行ない，番組の選定を行なった。その結果，攻撃シーンの多い番組のうち，最もよくみられている番組として〝仮面ライダー〟，攻撃シーンの少ない番組のうち，最もよくみられている番組として〝サザエさん〟が選定された。

被験者　観察学習実験に参加したのは上記の幼児のうち住吉区在住の４・５・６歳児（４歳２ヶ月～６歳２ヶ月）48名。うち男子28名，女子20名であった。保育園の担任保母に依頼し，ふだん親しくしている子どもについて，男子・女子２名ずつ計４名を一組としたグループを作った。男子が多かったため，一組のみは男子４名のグループとなった。これら12グループを，各群の平均年齢がほぼ等しくなるようにして，次の４群にわり当てた。これらは３つの実験群と統制群であり，実験群の被験者は攻撃的番組を，統制群は非攻撃的番組をみた。実験群のうち第１群は正強化群で，同室した成人はモデルの攻撃行動を承認・賞賛した。第２群は負強化群で，同室成人はモデルの攻撃行動を非難する言語化を行なった。第３群は無強化群で，成人はモデルの攻撃行動に対して何らコメントを与えなかった。統制群では同室成人は無強化の状態で被験者と一緒にVTRをみた。

実験デザイン　４（正強化・負強化・無強化・統制群）×２（被験者の性）

番組の作製　攻撃的番組の内容は変身人間・機械獣（たこ・ゴリラ）が登場。変身ののち，キック，格闘シーンを含み，機械獣をたおすまでのストーリーを再現した。非攻撃番組も同じく10分間に抜粋編集したものを用いた。これら実験用の番組とは別に，自由遊びの後にみせるためのマンガアニメ（２分間）を準備した。これは被験者全員が実験終了時にみた。

実験手続き　表１に示すごとくである。被験者は入室後成人とともにVTRをみて，第２番目のVTRを準備する間，自由遊びを行なった。

遊びの観察　VTRをみる部屋と自由遊びをする部屋は別の部屋であった。自由遊び場面では，刀・ピストル・ハンマー・Bobo人形・自動車・ブロック・折紙・ビーチボール・抱き人形という玩具を，被験者毎に毎回同じ位置にセットしておいた。遊びの場面では実験者Bが無関心な態度で同室し，被験者の行動記録を行なった。10分間の観察時間中，４人の被験者を10秒毎順次観察し，記録を行なった。観察の補助手段としてテープレコーダに会話を記録した。10分間の観察結果を以下のカテゴリーに分けて処理した。各カテゴリーとは，

○人に対する攻撃行動（もので人をたたく，ピストルを人に向けてうつ，刃で切りつけるまねをするなど）。

○Bobo人形への攻撃行動（人形を手やもののでたたく，ける，人形にうまのりになる，ふりまわすなど）。

○対象の特定できない攻撃行動（刃をふりまわす，ピストルをうつなど）

これらを攻撃的行動として，その行動数を各グループの個人毎にまとめて分析した。

結　　果

10分間の自由遊び場面での被験者の行動を次のように分析した。まず，行動描写とテープレコーダの両方の記録から遊びの流れをまとめ，(一)テレビの主人公との同一視がどのように起っているか，(二)グループ成員間の協同遊びとして，テレビの物語を模倣した遊びがどの程度行

表1　実験手続き

実験者A	実験者B	被験者（4人グループ）
	○テレビをみることを告げ，名前を確認し，被験者4名を連れて来る。	○実験者Bとともにプレイルームに入室
○「準備ができたよ」と言って被験者を呼びに来る。		○実験者Aとともに映写室に入る。
○被験者といっしょにテレビをみて承認 or 非難 or 無言の態度をとる。	○プレイルームの玩具の位置をもとにもどしておく。	○実験者Aとともにテレビをみる。
○テレビ終了後「もう一つのテレビの準備ができるまで，また遊んで待っていてね」	○「また遊んで待っていようね」と言い，再び無関心な態度で観察する。	○実験者Bとともにプレイルームにもどり，自由に遊ぶ
○10分後「準備ができたよ」と言って，再び被験者を呼びに来る。		○再び実験者Aとともにテレビをみる。
○被験者といっしょに無言の態度でテレビをみる。	○プレイルームの玩具の位置をもとにもどしておく。	
○テレビ終了後，スイッチを切り，終わりであることを告げる。	○テレビ終了後，被験者を保育場面にもどし，次の被験者を連れてくる。	○実験者Bとともに保育場面にもどる。
○次の被験者を待つ。間にビデオテープの準備をする。		

なわれているかを検討した。実験群と統制群の各グループについて，これらが生じたか否かを示したのが表2である。

(一)主人公との同一視については，ことばの模倣と行動の模倣との生起についてまとめた。ことばの模倣では，

〝おれは仮面ライダーだ〟
〝いくぞー，仮面ライダー〟
〝決闘だ，死ねー〟
〝えーい，仮面ライダーキックだ〟
〝怪獣だ，やっつけろ〟
〝おい，手を上げろ〟
〝うてー，怪獣だ〟
〝仮面ライダー，パーン・パーン〟
〝とぉー，死ね〟

などのことばが多くみられた。ことばの模倣は表2にみられるとおり，非攻撃番組をみたグループより，攻撃番組をみたグループの方が，より多くこれらのことばを使用していることが示された。統制群第1グループに○印があるのは，男子1人が〝とぉー，仮面ライダー〟〝スカイキック〟ということばを発していることによる。

主人公の行動の模倣では，

○変身ポーズ
○相手を怪獣とみたてた格闘
○ライダーキック

表2　実験群と統制群における攻撃行動の模倣

	主人公との同一視						成員による物語の模倣		
	ことば			行動					
	第1グループ	第2グループ	第3グループ	第1グループ	第2グループ	第3グループ	第1グループ	第2グループ	第3グループ
正強化群	○	○	○	○	○	○	○	○	○
無強化群	○	○	○	○	○	○	×	○	○
負強化群	○	○	×	×	○	×	×	×	×
統制群	○	×	×	○	×	×	×	×	×

※統制群の場合は実験場面で攻撃行動をみていないので直後模倣とはいえないが，日常みているテレビの遅延模倣が自由遊びの中にどの程度現われるかの指標となる。

など，番組主人公特有の行動がみられた。この項目での統制群の○印は，先述の男子がキックの模倣を行なったことによる。

(二)グループ成員における物語の模倣遊びは，表2にみられるとおり，非攻撃番組をみた統制群では示されなかった。実験群のうち，無強化群では3グループ中1つに，負強化群では3グループすべてに，物語の模倣遊びは示されなかった。

全体としてみると，非攻撃番組をみた統制群では，3グループのうち男子一人が，ふだんみているテレビの影響により，主人公のことばや特有の行動を模倣したものの，他の子どもは実験場面ではこのような行動を示さなかった。これに対し，攻撃行動をみた実験群では，主人公との同一視による行動や，グループ全体としての遊びは，VTRの物語を模倣したものが多いということが示された。実験群の中でも，正強化群は主人公との同一視が強く，3グループとも自由遊びでVTRでみた物語を模倣した場面のみられることがわかった。一方，負強化群は個人的に主人公との同一視をことばや行動で示す子どもはいるものの，比較的少ない傾向を示しており，グループ全体の遊びとしても模倣されないことが見出された。無強化群は主人公との同一視も強く，グループ成員間でVTRの遊びを模倣する傾向も比較的高いことが見出された。この結果から，同室する成人の無強化の態度は，どちらかといえば正強化に近い機能を果しているということができると思われる。

このことは，タイムサンプリングを行なった各個人の攻撃的行動についてみた場合，さらに明らかに示された。図1に各群の攻撃行動数の平均値を示した。図1にみられるとおり，統制群に比較して，正強化群は最も攻撃行動数が多く，ひき続いて無強化群であったが，負強化群では攻撃行動数は統制群に最も近い値を示した。4群の平均値について$\sqrt{X+0.5}$変換の分散分析を行なったところ，群間に有意な差のあることが見出された($F_{3,11}=36.09$, $P<.01$)。下位検定の結果を表3に示した。表3でも明らかなように，正強化群は他の3群より有意に多くの攻撃行動数を示し，無強化群は負強化群，統制群より有意に多くの攻撃行動数を示した。一方，負強化群は統制群との間に有意な差は見出されなかった。

次にこの全体値を男女別に示したのが図2である。この図にみられるとおり，総じて男子の方が女子より攻撃行動数の多いことが示された。また，男女ともに正強化群が攻撃行動数の最も多いこと，負強化群は統制群に近い低い値を示すことは共通であることが見出されたが，無強化群における攻撃数は，男子においてより正強化群に近い値を示すことが見出された。

4（群）×2（性別）の分散分析の結果，群の主効果($F_{3,40}=7.23$, $P<.01$)と性別の主効果($F_{1,40}=10.27$,

P<.01）に有意差が見出され，群×性別の交互作用が有意であることが見出された($F_{3,40}=2.86$, P<.05)。下位検定の結果，男子では正強化群，無強化群の攻撃行動数がほぼ等しく，統制群より有意に高い値を示しているのに対して，負強化群は統制群との間に有意な差は見出されなかった（正強化群vs統制群，t=4.35，df=40，P<.001；無強化群vs統制群，t=4.65，df=40，P<.001；正強化群vs負強化群，t=3.9，df=40，P<.001；無強化群vs負強化群，t=4.20，df=40，P<.001)。一方女子では，正強化群のみが統制群より有意に多くの攻撃反応数を示したが（t=6.45，df=40，P<.001)，他の2つの実験群では統制群との間に有意な差は見出されなかった。また，実験群3群の中でも，正強化群は他の2群より有意に攻撃行動数の多いことが示された(正強化群vs無強化群，t=4.65，df=40，P<.001；正強化群vs負強化群，t=5.40，df=40，P<.001)。

考　　察

本研究では，攻撃行動を多く示す実際のテレビ番組を材料として，テレビを一緒にみる成人がモデルの行動に与える強化の種類が，子どもの攻撃行動生起にどのような影響をおよぼすかを検討した。正強化，負強化，無強化という3つの条件を設定して攻撃番組をみる実験群に対して，非攻撃番組をみる統制群（無強化）を設けた。VTR観察後の自由遊び場面における被験者の行動を観察して分析を行なった。

正強化群と無強化群は主人公のことばや行動の模倣が多いというだけではなく，集団の遊びとしてVTRでみた遊びの流れをとり入れた模倣遊びが多いということが示された。これに対し，負強化群では，個人的に主人公との同一視を示す子どもはいたが，グループの遊びとして物語の模倣を行なうグループは全くなかった。しかも，

表3　実験群と統制群の平均攻撃行動数についての下位検定結果

	正強化群	無強化群	負強化群	統制群
正強化群		2.78*	5.17**	6.00**
無強化群			2.78*	3.61**
負強化群				0.83
統制群				

＊P＜0.5，＊＊P＜01を示す

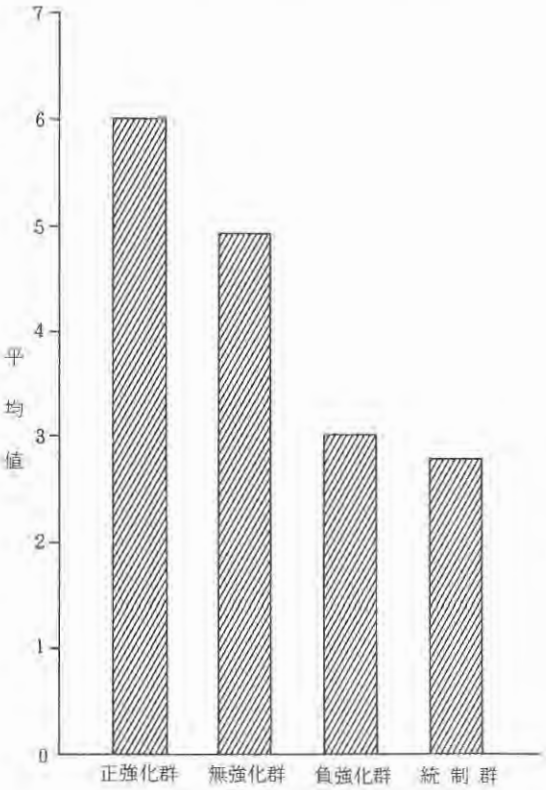

図1　各群の平均攻撃反応数

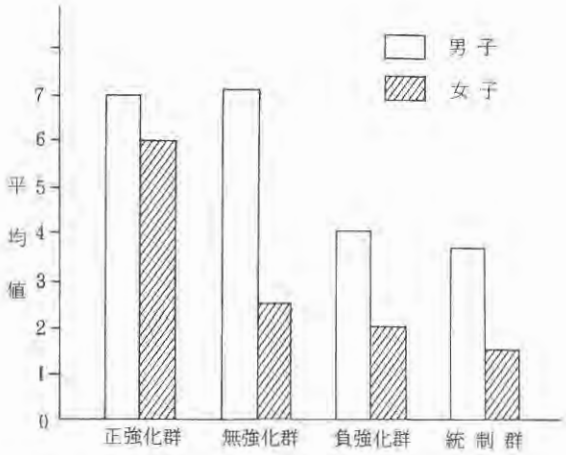

図2　各群の男女別による平均攻撃反応数

主人公のことばを模倣する子どもの数に対し，実際の行動を行なう数が低いことが示された。統制群の子どもたちは，実際の実験場面では攻撃のシーンは見ておらず，これらの値が低いことに対して，実験群は全体的に高い値を示した。このことから実験群の行動はVTRをみたことに基づく示範効果を反映したものであるということができよう。

正強化群は攻撃行動数が多く，攻撃シーンをみたこと，および正強化が攻撃行動への脱制止効果の役目を果したことがうかがわれる。この脱制止効果は無強化の場合にもみられたが，負強化ではこの効果が非常に弱いということが示された。

本研究では，強化の与え手が成人女性であった。このことと本結果にみられた脱制止効果とは，どのような関連があると考えられるだろうか。これと関連して，テレビ番組の視聴について本実験の被験者に対して行なったものと同じアンケートを大阪府下の幼児557名について行なった（平野区・西成区・城東区・淀川区・港区。男子277名，女子280名）。ふだんテレビを一人でみているか否かについては，一人でみていると答えた者は7.7%にすぎず，残りは家族のうち誰かと一緒にみているという回答があった。そのうち92.4%の子どもは一緒にみている者とテレビの内容について話し合うとしており，その相手は母親が43.3%，父親が27.8%，祖父母10.8%，その他兄弟や同年齢の子どもたちがこれに重複している。

この結果からもみられるように，ふだんの生活で母親が子どもたちの社会的行動に強化を与える機会は多く，その意味でも本研究の成人女性の存在は，日常場面における母親との相互関係に準じたものとみなすことができよう。ふだん攻撃的行動に対して負の強化あるいは無強化でいることの多い成人女性（母親）が，正の強化を与えるということは，子どもたちの攻撃行動をひき出すのにより強いインパクトを与え，強い脱制止効果を与える結果になったものと考えることができよう。

次に本研究では，攻撃行動に男女差のあること，また，無強化の果す機能が男子の場合と女子の場合とで異なることが見出された。

一般に，攻撃的な行動は男子に多くみられるといわれているが，これは〝男の子〟，〝女の子〟ということに対して，無意識のうちにおとなが行なっている養育態度と大きく関連していることが指摘されている。特に，親が攻撃行動のモデルとなっている場合は多くみられ，男子では体罰をよく行なう親の場合に，子どもの攻撃行動模倣率の高いことが見出されている（高島[7]，Fairchild, L., & Erwin, W. M[3]）。

先のアンケートのうち番組視聴率について調べると，上位の番組に性差が示された。男女別の人気番組をみてみると，男子では〝仮面ライダー〟や〝ウルトラマン〟などの攻撃シーンの多いものが，女子に比べてよくみられている（88%）。女子は男子に比べて，〝まんが日本昔ばなし〟などの非攻撃番組をよくみており，男子に人気のある攻撃的番組をみている女子は男子の４分の１（23%）であった。

このように，男子が攻撃的シーンの多い番組を好んでみるのは，ふだんおとなが男子の攻撃的行動に対して比較的寛大であることに由来するものと思われる。男子はテレビの主人公と自分とを同一視し，攻撃行動を行なうことで〝怪獣（悪）〟をたおし，主人公の受ける正の強化を間接的に体験しているのであろう。一方，女子は，ふだんから攻撃的行動を行なうことについては，男子に比べて禁止されることが多く，主人公との同一視を行なうことが正の代理経験となりにくいため，攻撃的番組をみる機会が減少し，行動そのものも相対的な値は低くなるものと考えられる。

これらのことを背景とすると，同室した成人が無強化である場合，男女の攻撃行動の模倣に差が出たのは次のように考えることができよう。すなわち，男子の場合，ふだん攻撃行動を行なった際，女子に比べて正の強化を受けることが多い。そのため，男女を相対的にみると，同じように攻撃行動を行なった場合，女子の方が規範からの逸脱を感じる度合は強いと思われる。このことは，実験群３群のうち女子では正強化群のみが攻撃行動数の多かったことからも示されるであろう。つまり，女子は攻撃行動を抑制することを学ぶことの方が多いので，言語による承認がない限りは，無強化の意味を承認と受け取る傾向は比較的弱いものと考えられる。一方，男子ではふだんから女子よりも攻撃行動を行なうことについて承認される経験をくり返し行なっているため，社会的な強化（賞賛や罰）の与え手である成人が，モデルの示す攻撃行動に何の強化も与えない場合には，それを承認したものと受けとる傾向が強くなると考えられる。

本研究では，おとなの与える強化が子どもの攻撃行動の生起におよぼす影響を検討してきた。観察学習の持つ脱制止効果（正強化の場合）や制止効果（負強化の場合）については，従来の研究から反応傾向の予測をし得る。今後の課題として，無強化事態での性差が幼児期に至るまでのどの時点で現われ始めるのかということ，また例えば高島[7]らが指摘しているような親の養育態度など，どのような要因がその出現に影響をおよぼしているかという点についてさらに検討していく必要があろう。

要　　約

本研究では攻撃行動を多く示すテレビ番組が，幼児の攻撃行動生起にどのような影響をおよぼすかについて検討した。テレビを一緒にみる成人がモデルの攻撃行動に与える強化を操作し，その影響を調べた。攻撃的番組をみる実験群には正強化群（賞賛群），負強化群（罰群），無強化群の３群を設定し，統制群として非攻撃的番組をみる群を設けた。

被験者は４～６歳児48名（男子26名，女子22名）であった。被験者にアンケートを行ない，視聴率の最も高い番組につき，攻撃シーンの多い攻撃的番組と非攻撃番組を選定した。これらの30分間番組を，ストーリーを保って10分間に編集しなおし，実験フィルムとして用いた。被験者は男子２名，女子２名の４名が一グループとなって（一グループのみ男子４名）フィルムを観察した。直後の10分間の自由遊び場面における各被験者の行動についてタイムサンプリングを行ない，会話をテープレコーダに記録して分析を行なった。

結果は以下のとおりであった。

１）全体として攻撃行動数は男子の方が女子より多かった。

２）実験群が統制群より有意に多くの攻撃行動数を示したことから，実験群に攻撃的番組をみたことによる示範効果のあったことが示された。

３）男女をこみにしてみた場合，実験群のうち正強化群は最も攻撃行動数が多く，統制群と有意差のあること，また負強化群は最も攻撃行動数が少なく，統制群との間に有意な差は見出されなかった。また，無強化群は統制群より有意に攻撃行動数が多く，正強化群とほぼ等しい値を示した。

４）強化の種類と性別との交互作用が見出された。すなわち，男子では正強化群，無強化群が負強化群，統制群より有意に攻撃行動数が多いが，女子では正強化群のみが統制群より有意に多くの攻撃行動数を示した。

攻撃行動数が相対的に多いこと，および正・負強化の効果については従来の研究結果と一致した。無強化群で見出された男女差について，ふだん行なわれている攻撃行動に対する〝男の子〟，〝女の子〟としての養育の違いとの関連から考察を行なった。

文　　献

1）Stein, Aletha H. & Friedrich, Lynette K. : Impact of television on children and youth. Hetherington (Ed). Review of child development research. Chicago, IL : U Chicago Press (1975)

2）Hayes, Steven C. ; Rincover, Arnold & Volosin, Diane. : Variables influencing the acquisition and maintenance of aggressive behavior : Modeling versus sensory reinforcement, J. Abnorm. Psychol., 89, 254～262 (1980)

3）Bandura, A., Ross, D., & Ross, S. A. : Imitation of film－mediated aggressive models, J. Abnorm. Social. Psychol, 66, 3～11 (1963a)

4）Bandura, A., Ross, D., & Ross, S. A. : Vicarious reinforcement and imitative learning. J. Abnorm. Social. Psychol, 67, 601～607 (1963b)

5）Rosekrans, M. A., & Hartup, W. W. : Imitative influences of consistent and inconsistent response consequences to a model on aggressive behavior in children, J. Perso. Social. Psychol, 7, 429～434 (1967)

6）Collins, W. A., Berndt, T. J., & Hess, V. L. : Observational learning of motives and consequenses for television aggression : A developmental study, Child Development, 45, 799～802 (1974)

7）高島恭子：攻撃的行動の獲得機序に関する研究，教育心理学研究，18，139～148 (1970)

8）Puelo, Joseph S. : Acquisition of imitative aggression in children as a function of the amount of reinforcement given the model, Social Behavior & Personality, 6, 67～71 (1978)

9）根本橘夫，原野広太郎，高橋昌治：代理強化及び成人の在・不在が幼児の攻撃的行動に及ぼす影響，教育心理学研究，23，32～36 (1975)

10）Mandel, Robert A. : The relationship between approval or disapproval of filmed violence and aggression in children, Dissertation Abstracts International, 38 (8-B) 3894 (1978)

11）Drabman, Ronald S. & Thomas, Margaret H. : Children's imitation of aggressive and prosocial behavior when viewing alone and in pairs, J. Communication, 27, 199～205 (1977)

12）O'Neal, Edgar C., McDonald, Peter J., Cloninger, Cindy & Levine, Douglas. : Coactor's behavior and imitative aggression, Motivation & Emotion, 3, 373～379 (1979)

13）Fairchild, Louis & Erwin, William M. : Physical punishment by parent figures as a model of aggressive behavior in children, J. Genetic Psycho, 130, 279～284 (1977)

（昭和57年11月９日受理）

Summary

It has become one of a social problem that a TV violent scene affects on aggressive behavior in young children. The purpose of this study was examined the modeling effect of these TV program under some conditions of social reinforcements ; positive, negative and no reinforcement. There were these 3 conditions in experimental group, and a female adult gave each reinforcement to the model's violent behavior during observational session. Control group subjects watched at a non-aggressive TV program in the no-reinforcement condition.

48 from 4 to 6 year-old children served as subjects (26 boys and 22 girls). There were 12 groups consisting of 2 boys and 2 girls (only 1 group was consisted of 4 boys). Each condition (3 experimental and a control) had 3 sub groups respectively. After watching at TV subjects had free play session for 10 minutes. The number of aggressive behavior and their conversation were recorded.

Following were main results :

1) Boys showed more aggressive behavior than girls.

2) Mean number of aggressive behavior of the experimental conditions was greater than that of control condition. This meant that there was a modeling effect in the experimental conditions.

3) The positive reinforcement group and the no-reinforcement group showed greater number of aggressive behavior than the negative reinforcement group and the control group.

4) The interaciton between reinforcement and sex was significant. Boys showed greater aggressive behavior in the positive and the no-reinforcement group than in the negative reinforcement and the control group. On the other hand grils showed greater aggressive behavior only in the positive reinforcement group than in the control group.

The sex difference in the no-reinforcement condition was discussed by daily nursing attitude of sex roles.